

創造性と文化

監事 黒川 兼行

アメリカの学会でよい論文を発表し終えると聴衆から握手を求められたり、祝福の言葉を受けるのが普通である。これに対し日本の学会で同じような経験をした人が何パーセントいるだろうか。おそらくごく少数であろう。この差は文化である。

英語の culture を日本語に訳すと文化となる。日本語で文化というと文明開化を連想して良い面だけのようにならされているが、英語の辞書を引いてみると、社会を通じて習得され一つの世代から次の世代へ引き継がれる考え方や行動様式を意味し、良い面も悪い面も文化に入る。こういう意味で文化という言葉を使うと、日本で創造性の発揮を阻害しているものは日本の文化そのものだというのが、日米の企業でそれぞれちょうど14年ずつ経過した時点での私の結論であったが、その2年後の今日でもこの考えは変わっていない。

自分達と異質な考え方や振舞いをする者がいたら、グループで制裁を加えて当然という帰国子女に対するいじめの文化は子供達ばかりでなく、大人にも広く浸透していて、小さな改良ならほめるが、だれかが全く新しいことをいい出したり、創造性を発揮しようとするすると周りが袋叩きにして止めさせようとする。これは私の乏しい体験だけでなく、例えば某社の中央研究所で2年間研修をして帰米した研究者も詳しく報告しているところである。

近年の貿易不均衡に由来する外圧のために、創造性ある人材の育成が叫ばれ、具体的には入学試験のやり方を変えたり、大学院だけの大学を設置したり、基礎研究費を増額することが議論されている。しかし創造性のある人はアメリカでも数%いるかないかであり、その割合は日本とあまり違わないように思う。それに対し、創造性が発揮されそうになったときのライバルを除く周囲の反応に、アメリカと日本で雲泥の差がある。一方は励まし、盛り上げようとするのに対し、他方は足を引っ張って引きずり落してしまう。

もし日本人の一人一人が日本のこういった文化に従って無意識に行動するのはなく、ほんの少し意識して行動するようになれば、少なくとも欧米と同じ位の割合で日本でも創造性のある成果が得られるのではないかと思うので、参考にして頂ければ幸いです。

会 長	岩崎昇三	編 集 長	関口利男	北海道支部長	栃内香次
副 会 長	末松安晴・堀内和夫 稲場文男・葉原耕平	規格調査会委員長	柳井久義	東北支部長	安達三郎
総務理事	甘利俊一・千葉正人	研究組織委員会委員長	榎本 肇	東京支部長	大越孝敬
会計理事	高梨裕文・石黒辰雄	基礎・境界研究グループ 運営委員会委員長	白川 功	信越支部長	山崎一生
編集理事	中村道治・原島 博 山口治男・村野和雄	通信研究グループ 運営委員会委員長	後藤尚久	北陸支部長	龍山智栄
企画理事	田崎公郎・加藤孝雄	エレクトロニクス研究グループ 運営委員会委員長	高橋 清	東海支部長	内山 晋
調査理事	柳川隆之・大附辰夫	情報・システム研究グループ 運営委員会委員長	牛島和夫	関西支部長	山下一美
監 事	池田博昌・岩垂好裕			中国支部長	翁長健治
				四国支部長	大沢 寿
				九州支部長	吉田 将